

学部・研究科名生命科学部

学部長・研究科委員長名坂田 洋一

学科名・専攻名バイオサイエンス学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	基礎的・基盤的知識の修得と生命科学に係る実践的な専門科目を体系的に学ぶため、「総合教育科目」、「外国語科目」、「専門教育科目」の3つの科目区分に授業科目を配当し、さらに、これらを細分化することによって効果的な学修を行っている。また、修得した知識と技術から専門性の高い卒業論文研究に導くための科目も配当している。	1年次生の入学時にリメディアルテストを実施し、大学教育を受けるにあたって不足している基礎学力を補う。全学年に渡り学業不振者には担任が面談し、学習指導を実施している。基準となる年間最低修得単位数を設定することで、学年による習得単位数に偏りがないようにしている。授業アンケートを実施し、教員にフィードバックしている。全学FD委員会での議論等を通し、定期的に効果的なカリキュラム改正を行っている。	講義履修生には、事前に評価方法を明示し、試験またはレポートを客観的に点数化することにより、公平性かつ適正性を確保している。学科での卒業判定会議を開催し、厳格な判断により学位を授与している。	卒論中間発表ならびに卒業論文審査を、複数の教員により行い、学生のディプロマ・ポリシーに見合う学習成果を適切に評価している。	教育課程の編成や実施方針の適切性については、適宜、学科所属の全教員により、学科会議において慎重に議論され決定されている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 早い段階から実験実習をとおして、実践的な専門知識・技術を修得する。	【長所】	【長所】	【長所】	【長所】
	【特色】 2年次から実習科目を多く配当している。	【特色】	【特色】	【特色】	【特色】
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名	シラバス	指導報告書	シラバス	中間発表要旨集、卒論発表要旨集	

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	アドミッション・ポリシーに基づき、生命科学に関する強い関心を持ち、食料、環境、健康問題の解決にチャレンジできる学生を求めている。学生が入学するにあたり必要な知識については、入試科目として示している。これらは入試要項、大学ホームページ等に記載している。また一般入試やセンター試験利用入試といった筆記試験による選抜方法の他に推薦入試、社会人入試、外国人入試等を設定している。推薦入試では小論文と面接を行うことで、学力のみならず、生命科学に関する問題意識や論理的思考、多様な人々との協調性を持った学生の受け入れを行っている。また、学科長を中心とした学科教員による入試判定委員会により合否判定を行うことで公平かつ客観的な入学者選抜を実施している。	各入試制度別の入学者数の把握を行うことでアドミッション・ポリシーに基づいた入試制度が機能しているか点検を行っている。特に指定校推薦入試については、本年度も入学後の学生の成績や推薦状況に応じて指定校の検討を行ってきた。また、公募制推薦入試に関しても面接において基礎学力を評価できる方法を活用することで、最低限の学力を担保できるよう努力している。加えて、学科会議内で入試制度別の受け入れ人数や試験科目の見直しについて議論を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 多種の入試を行うことで、多様な学生が入学する環境となっている。就職状況からも多くの卒業生が食料、環境、健康系の企業に就職しており、求める学生像に沿っていると考えられる。	【長所】 指定校を検討し見直しを行うことで、毎年、一定数の入学者を確保している。
	【特色】 生命科学に関するより高度な専門知識の習得を求めて、毎年大学院へ一定人数が進学している。	【特色】 幅広く生命科学に興味を有する学生を募集するために理科の選択科目に化学、生物、物理を設定している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし。
	【課題】 特になし。	【課題】 特になし。
根拠資料名	入試要項、大学ホームページ、就職状況一覧	入試要項

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	「設置の趣旨」に基づき、バイオサイエンス学科では、生物と化学を基盤として、個体内、さらには、細胞内の生命現象を分子機能の観点から理解する生命科学を修得させて、農学、さらには、産業に応用できる専門家を養成するための専任教員を配置することとしている。 専任教員の採用は原則として公募し、募集要項にて専門分野に関する能力、教育に対する姿勢等、教員に求める資質を明示している。	専任教員として、教授 10 名、准教授 5 名、助教 3 名の計 18 名（男性教員 15 名、女性教員 3 名の体制）とし、文部科学省の設置基準を上回っており、十分な教育・研究指導を行うことが出来る。 動物、植物、細胞分子機能の 3 分野に、各 6 名ずつ教員を配置し、適切な年齢・職位バランスを考慮した採用・昇任を行っている。 担当授業は分野で均等になるように配置することで、1 教員当たり担当講義数は偏ることなく配当している。	教員人事については、学科の教授により構成される人事委員会により、以下の資料に基づき実施している。 募集・採用・昇格については、職階ごとに「東京農業大学・短期大学部における教員採用・昇格に関する条件」を定め、「研究業績得点化表」・「教育・管理業務・社会活動評価得点化表」に基づき、審査を実施。採用にあたっては、人事委員会による候補者の一次審査(書類審査、3 名程度の候補者選抜) および二次審査(面接)を実施している。新規採用者については「大学教員専任化審査判定表」を採用時に作成し、5 年目に判定表を基に専任化の判定を行う。 その後全学的な人事専門委員会と教授会にて審査が行われる。	本年度より全学的な FD 委員会に 3 名の学科教員が委員として参加。 毎年、自己教育評価を実施し、授業・研究指導・国際交流・大学運営・学外活動を評価。授業については、上記に加えて学生による授業評価を実施し、授業向上に取り組んでいる。 また、先端研究を推進させるには、先端技術を駆使した機器及び試薬の使用が必要であることから、原則として教員全員が、科学研究費補助金をはじめとする競争的研究資金に申請することとし、年度末に外部資金申請者を確認している。	平成 29 年度より動物・植物・微生物・機能性分子の 4 分野体制を動物・植物・細胞分子機能の 3 分野体制とする新体制となった。 平成 29 年度まで 1 名だった女性教員を平成 30 年度より 3 名に増員したことで、より細やかな女子学生への対応可能となり、女性視点からの意見を得られる機会が増えた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 生命科学の幅広い専門分野に渡る教員の配置	【長所】 学科を構成する 3 分野にバランス良く均等な教員数を配置している。	【長所】 点数による明確な昇格目標の提示	【長所】 競争的研究資金の獲得推進	【長所】 3 分野に各 2 研究室とバランスのよい 6 研究室体制
	【特色】 生命科学の幅広い分野の人材確保	【特色】 3 分野 6 研究室に各 3 名の教員を配置。	【特色】	【特色】 競争的研究資金への申請	【特色】 複数の女性教員配置
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名	設置の趣旨（文科省提出資料）		東京農業大学・短期大学部における教員採用・昇格に関する条件、研究業績得点化表、教育・管理業務・社会活動評価得点化表、大学教員専任化審査判定表	自己教育評価 授業評価	

学部・研究科名生命科学部

学部長・研究科委員長名坂田 洋一

学科名・専攻名分子生命化学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	文部科学省に対する設置申請に基づいた教育課程を編成している。2024 年度カリキュラム改訂へ向けて、再編成を検討中である。	本年度は一部が遠隔授業となったが、農場実習、学生実験、演習に関しては感染対策を講じた上での対面形式で実施出来た。一部の遠隔講義についても、昨年度の経験を踏まえた教員の努力により、適切に実施出来た。低学習意欲の学生情報を教員間で共有し、必要に応じて面談も実施した。	事前に評価方法を明示するとともに、適切な成績評価に努めており、問題は発生していない。	卒業論文に関して、中間発表会や卒業論文発表会を複数の教員により行い、学位授与方針に従った評価を行っている。	学科完成年度をむかえ、教育課程及びその内容、方法の適切性に関して学科内で議論している。2024 年度カリキュラム改定において、改善・向上を検討中である。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 なし	【問題点】 適正状態の継続	【問題点】 適正状態の継続	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・2024 年度カリキュラム改訂へ向けた準備	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 ・2024 年度カリキュラム改訂へ向けた準備
根拠資料名	講義要項	講義要項	授業評価アンケート	中間発表会資料、卒業論文発表会資料	なし

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	本年度もこれまでと同様の学生募集、入学者選抜を行った。募集の制度は適切であり、入学者選抜方法は公正である。推薦入学については面接官による不公平が無いよう、質問内容や審査基準などを可能な限り統一した。また本年度より、これまで課してきた小論文を事前課題に変更して実施したが、面接において人間性に加え基礎学力や理解度についても測り、適正な学生の受入を目指した。昨年度に引き続き、指定校の範囲を拡大し志願者の開拓を行ったところ、大幅に志願者が増加し19名の応募があった。年内入試での学生確保数は35名であった。	種々の入試制度別に学生の受け入れ方針に基づいているか点検するとともに、推薦入試に関しては入学後の学習意欲や習熟度を追跡し、指定校の選定などに反映させている。本年度は、指定校を拡大し2科目受験も導入したので、結果を十分に検討し、来年度以降の各入試制度での受け入れ人数などについて議論する予定である。多様な受験制度により、高校で化学を履修していない学生が一定数見られるが、化学に関して高い意欲の学生が多く入学している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・化学に対する高度な専門知識を求める学生が多く、大学院進学希望者も多い。	【特色】 ・化学に関して高い興味を持つ学生が多い。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・年内入試による学生確保数ที่เขา学部他学科に比べ低い傾向のため、指定校の選択や広報戦略を引き続き検討する。	【課題】 ・2科目入試の結果と指定校選定について引き続き検討する。
根拠資料名	なし	入試要項

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	学科設置の趣旨に基づき、農学・生命科学領域において化学的知識に基づいた展開可能な基礎力を駆使し様々な案件に対応可能な人材を養成可能な専任教員を配置する方針としている。教員の公募、採用時には本方針を明示している。	専任教員13名（教授4名、准教授5名、助教4名）を2分野（有機化学分野、分子機能解析学分野）にバランス良く配置し、十分な教育・研究指導が可能な体制を整えている。本年度は新規助教3名の採用を適切に行った。	教員人事に関しては、学科内の専任教授よりなる人事委員会を組織し、大学の定める「教員採用・昇格に関する条件」に基づき判断している。本年度は新規助教3名を採用するとともに、来年度退職予定者の後任人事1名について検討を開始した。	新任教員に対する研修を通じて教員としての資質向上をはかっている。また、自己教育評価や学生による授業評価を通じた評価体制が整っている。	教員の資質や年齢構成を総合的に判断しながら教員の配置を行っている。本年度は新規助教3名を採用するとともに、来年度退職予定者の後任人事1名について検討を開始し、継続的な教育・研究体制の維持を図っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・化学を基盤とした教育・研究体制の充実	【長所】 ・化学を基盤とした教育・研究体制の充実	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・化学を基盤とした幅広い生命科学分野の教員配置	【特色】 ・化学を基盤とした幅広い生命科学分野の教員配置	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・適正状態の維持に必要な人事	【課題】 ・適正状態の維持に必要な人事	【課題】 ・	【課題】 ・適正状態の維持に必要な人事
根拠資料名	設置の趣旨	学科ホームページ	人事申請資料	自己教育評価 授業評価	なし

学部・研究科名生命科学部

学部長・研究科委員長名坂田 洋一

学科名・専攻名分子微生物学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	学科内に教学検討委員会を設け、各授業科目の内容や関係性、学生の理解度など総合的に評価、改善を行っている。 なお、教学検討委員として教授、准教授、計 10 名で構成されている。	学科内の教学検討委員会にてシラバスの内容確認や科目の連携など適宜活性化のための検討を進めている。 また、科目として最新の研究紹介などを行い、学生のモチベーションアップを心がけている。	大学の評価方針に従い、適切に成績評価および単位認定を行っている。	全教員で学科 GPA の確認やスコア向上のための努力を行っている。また、授業評価の結果を受け、学生の学習状況を把握している。	多くの科目を 2 名以上の複数の教員で担当しているため、客観的な視点で改良を行っている。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 発表する能力の向上	【長所】 理解度の向上 モチベーションアップ	【長所】 なし	【長所】 授業評価に基づく授業の改善	【長所】 複数教員での授業進行、内容および方法改善
	【特色】 1 年生の前期・後期でそれぞれプレゼンをする科目を配置、経験を積ませている。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 一般的な質問の他、個別に学生からのコメントを収集している。	【特色】 なし
現状説明を踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	シラバス（教務課）	フレッシュマンセミナーシラバス 共通演習シラバス （教務課）		GPA グラフ（教務課）	

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学の方針に基づき、HP や大学案内などでアドミッションポリシーを明確に示している。また、学生募集に関しては受験者に対する進路相談を複数回行っているとともに、高校への出張講義・出張実験、体験実験の受け入れを行っている。入学者選抜に対しては共通テスト、大学独自試験以外に指定校推薦や一般推薦、実践スキル総合型やキャリアデザイン総合型選抜入試も取り入れ、多様な学生受け入れや全国各地域から受験できる様な体制を整えている。また、推薦の面接には複数の教員で対応し、適切な選抜を行っている。	入試選考会議や学科会議にて、学生受け入れの適切性を適宜議論し、これを受けて学生受け入れ基準の見直しを行っている。また、入学後の学生に対し、出席や成績などの追跡調査を行い、これらが不十分な学生から聞き取りを行い、選考基準の見直しを進めている。 また、上述を踏まえて学生募集の手法などの改善も適宜行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 東京近郊からだけでなく、遠方からの学生も集めている。 共通テストおよび大学独自試験で受験しない高校から指定校推薦で受験してくる。	【長所】 学生募集や選抜時だけでなく、入学後の学生からの聞き取り、指導の中から生まれた改善すべき事項に対して速やかに対処している。
	【特色】 推薦制度を利用し、全国各地から学生を集めている。 推薦制度を利用し、多様な学生を集めている。	【特色】 在学生に対する個別対応の中から学生が何を求めて入学したのかをより明確にし、選抜にフィードバックできる体制を整えている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	指定校リスト（入学センター）	

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	HPおよび冊子での大学案内、募集要項および学科パンフレットにて方針を分かりやすく説明している。	学科内に教学検討委員会、機器備品検討委員会、広報委員会を設置し、より良い教育・研究体制を整えている。	教員募集や採用については学科内教授会で基準を設けている。 半年に一度専任教授会にて全教員の業績を確認し、昇格の規定を満たしているか、将来的にどのタイミングで昇格できるかを議論している。	学内で行われる勉強会などにはできる限り参加するように努めている。専任教授を中心に各種委員会に所属し、大学の方向性の確認や学科としての対応を常に考えている。	学科専任教授会を中心に、適宜、学科、分野、研究室の教育研究の内容確認および方向性の明確化を進めている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 受験希望者が理解しやすい手法をとっている。	【長所】 各種委員会で適宜熟考し、学科会議で議論し最善の手法を決める。	【長所】 適切な募集・採用・昇任を進めている。	【長所】 教員の様々な事象に対する対応力が向上している。	【長所】 教員個々の自由度を保ちつつ、必要な点検・改善を進めている。
	【特色】 キーワード、センテンスなどで理解度を上げている。	【特色】 専任教員は職階に関係なくいずれかの学科内委員会に所属する。	【特色】 採用・昇格には本人の研究・教育の技量をプレゼンで確認している。	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	学科紹介パンフレット、HP (入学センター)	機器備品リスト（会計課）	人事資料（学務課）		研究業績（学務課）

学部・研究科名生命科学部

学部長・研究科委員長名坂田 洋一

学科名・専攻名バイオサイエンス学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	教育の理念である「実学主義」に基づく体験型カリキュラムを多く取り入れた実習や実験を通して、集団内でのコミュニケーション能力、リーダーシップ能力、協調性や対人関係の構築力を養う。	学科の教育上の目的である「バイオサイエンスに関する専門的な知識と技術を習得し、一つの課題に対して自立的に解決できる能力を身につけさせる」について、研究室における専門教育により達成させる。	学科全体としてのディプロマポリシーの達成状況を判断し、教育体制の改善に役立てる。さらに、コロナ収束後の教育環境を見据えた新たな教育指導体制を確立する。
実行サイクル	4 年サイクル（令和 3 年～ 令和 6 年）	4 年サイクル（令和 3 年～ 令和 6 年）	4 年サイクル（令和 3 年～ 令和 6 年）
実施 スケジュール	共通演習（1 年次）および実験実習（2 年次～3 年次前期）において教育指導する	研究室における専門教育の実践：3 年次前期の研究室配属後に、研究室ごとにバイオサイエンス基礎実験、バイオサイエンス応用実験で専門知識・技術を習得するためのトレーニングを行う。4 年次においては、卒業論文研究の計画発表会、中間発表会、卒論発表会を行い、達成度に応じた教育指導を行う。	ディプロマポリシーの達成度評価：研究室ごとに 4 年次の卒業論文および論文発表会を審査し評価する。また、卒業時にポリシーの各項目に対する自己評価アンケート調査を行い、学科全体のポリシー達成度をモニターする。
目標達成を測定する指標	共通演習、実験実習の出席状況により判断する。	3 年次のバイオサイエンス基礎実験、バイオサイエンス応用実験における出席状況と評価、および 4 年次の計画発表会、中間発表会、卒論発表会の評価により、達成度の最終判定を行う。	卒業論文の評価をもって学生個人個人のポリシー達成度を判定する。また卒業時のアンケート調査結果を集計し、卒業論文の評価と併せて学科全体としてのポリシー達成状況を判断する。さらに、新たな教育指導体制に対する評価を行う。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	共通演習（1 年次）および実験実習（3 年生対象）において教育指導を行った。	バイオサイエンス基礎実験、バイオサイエンス応用実験（3 年生対象）、卒業論文（4 年生対象）において研究指導を行った。	コロナ禍において、最大限の努力により卒業論文（4 年生対象）における研究指導を行えた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 実験実習は長期（約 1 年）にわたるため、同学年の集団内でのコミュニケーション能力、リーダーシップ能力、協調性や対人関係の構築力を養う能力を築くには十分な時間を提供することができる。	【長所】 バイオサイエンス基礎実験、バイオサイエンス応用実験は、卒業論文研究に取り掛かるための専門知識・技術を習得するためのトレーニングと位置付けられる。従って、卒業論文完成という最終ゴールまでの達成度を、個々に追跡することができる。	【長所】 卒業論文発表会と提出された論文の内容、自己評価アンケート調査により、ディプロマポリシーの達成度を個々に評価することができる。また、評価内容は改善点を明確化するための資料となる。
	【特色】 実験実習は、「無機化学実験」、「有機化学実験」、「微生物学実験」「生化学実験」「基礎生物学実験（一）」「基礎生物学実験（二）」の 6 つからなる。それぞれの実験は学問分野や操作方法で異なる点が多く、実験を速やかに遂行するためには、特に集団内でのコミュニケーション能力や協調性を身につけていることが必要である。	【特色】 卒業論文研究を遂行するためには、能動的な行動が必要である。従って、専攻実験、卒業論文を通してアクティブ・ラーニングを実施するためには最適な科目である。	【特色】 卒業論文研究を通して、卒業後の社会人としての自覚を身につけることができる。

2021（令和 3）年度 包括的な点検・評価報告書

様式 2

現状説明を踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 新型コロナウイルス感染拡大防止のための緊急事態宣言発出により、3 年生対象の実習は対面で行えず、オンデマンドによる配信のみとなったため、例年と比較して教育が不十分となった。	【問題点】 新型コロナウイルス感染拡大防止のための緊急事態宣言発出に伴う入構規制により研究室での活動が制限されたため、3、4 年生への教育的指導に十分な時間をかけることができなかった。	【問題点】 卒業論文研究への着手が難しかった学生が数名存在したため、審査・評価の工夫が必要である。
	【課題】 教育を補足するサポートが必要である。	【課題】 3 年生が円滑に卒業論文研究に取りかけられるよう教育的指導が必要である。	【課題】 審査・評価できない最大の理由は、引きこもり等により研究室へ行けないことによる。さらに今年度は、新型コロナウイルス感染により、対応に苦慮する学生が多く見られた。本学健康増進センターのカウンセラーと密に情報交換することにより改善が見られ炉場合が多く、今後、本学健康増進センターとの連携を継続する。
根拠資料名	基礎生物学実験（二）の出席状況が分かる資料	バイオサイエンス基礎実験、バイオサイエンス応用実験（3 年生対象）、卒業論文（4 年生対象）の評価	

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	生命科学分野における先端研究を一層推進させるには、先端技術を駆使した機器及び試薬の使用が必要であるため、外部からの競争的研究資金を積極的に導入する。	学会発表や学術論文等を通して、最新の研究成果を国内外の研究コミュニティに発信する。	社会への発信力強化の一環として、一般向けの講義・講演会やネット・印刷物等を通した研究成果発信を推進する。
実行サイクル	____ 4 ____ 年サイクル（令和 3 年～ 令和 6 年）	____ 4 ____ 年サイクル（令和 3 年～ 令和 6 年）	____ 4 ____ 年サイクル（令和 3 年～ 令和 6 年）
実施スケジュール	原則として教員全員が、科学研究費補助金をはじめとする競争的研究資金に申請する。	全研究室がそれぞれ国内・国外の学会や学術雑誌等で研究成果を発表することにより、的確なプレゼンテーション、さらに研究者間でのコミュニケーションにおける専門的なディスカッションを行う。	学科教員が、学内・学外で模擬講義・出張講義・講演会を実施することにより、一般向けの発信活動を行う。また、学科ホームページおよびパンフレットのコンテンツを検討・改訂することにより、メディア発信活動を行う。
目標達成を測定する指標	学科の外部資金申請者を確認する。	研究室ごとの国内学会・国外学会・学術雑誌での成果発表回数を確認する。	学内外での模擬講義・講演の回数を確認する。また、学科ホームページおよびパンフレットのコンテンツ改訂を確認する。遠隔による研究成果発信の機会を増やす。
自己評価 (☒ を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	概ね、全ての教員が学内におけるプロジェクトや科学研究費補助金等の競争的研究資金に申請し、研究資金獲得数は、科研費が 8 件、科研費以外が 8 件を達成できた。	・概ね、学科所属の研究室が国内外の研究コミュニティで研究発表に努め、研究成果を論文として国際科学雑誌へ 36 報掲載した。 ・オンラインアプリの活用により、海外研究者によるセミナーなどへの参加はのべ 3 回にとどまった ・国内外における学会発表数は 62 件を達成できた。	・3 件の模擬講義を実施した。 ・オープンキャンパス（令和 3 年 8 月 7 日、8 日）において、オンライン模擬講義を行った。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・学科に所属する全ての研究室（研究分野）が申請できている。	【長所】 オンラインアプリの活用によりグローバルに情報発信・情報収集することが可能となる一面もあった。	【長所】 ・コロナ禍により、対面で予定されていた講義や講演会の開催回数が減少し、印刷物の配布にも支障が生じたが、オンラインアプリの活用が進むことにより、研究内容を容易に発信できる方法の可能性が広がった。
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・オンラインアプリの活用により、これまでよりも時間や経費にとらわれなくても済んだ。	【特色】 ・特になし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・競争的研究資金を申請または獲得できていない教員がいる。 【課題】 ・学科教員全員が競争的研究資金の申請及び獲得を目指す。	【問題点】 ・特になし（強いて挙げれば、全ての研究室が国外での発表を行えていない。） 【課題】 ・国外発表の数を増やす。	【問題点】 ・特になし 【課題】 ・学科ホームページの亢進の頻度を増やすなど、新情報をなるべく早く発信できるようにする。

根拠資料名	総研管轄資料	自己点検システム	
-------	--------	----------	--

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	進学／就職活動への円滑な導入を支援するための学科独自の体制を構築する。	New Normal を念頭に生命科学分野の教育・研究を通じて、グローバルな視点を持ち、世界の人々と対等に意見交換できる指導体制を構築する。	従来型のオープンキャンパス、模擬講義、出張講義、市民講座、学会基調講演に加えて、web 配信・web 談話会などを活用して生命科学分野の研究をわかりやすく社会に発信し、高校生を中心に一般社会への科学の普及に努める。
実行サイクル	4 年サイクル（令和 3 年～ 令和 6 年）	4 年サイクル（令和 3 年～ 令和 6 年）	4 年サイクル（令和 3 年～ 令和 6 年）
実施スケジュール	3 年次前期：卒業生による就職支援懇談会および専攻による大学院説明会の計画 3 年次後期～4 年次前期：計画の実施 4 年次後期：進路内定状況の把握、進路未定者と面談、必要に応じた対応策の策定	4 月：（COVID-19 の感染状況に応じた）留学プログラムの学生への周知。web を活用した外国人研究者によるセミナー・討論会の企画。教員の国際学会への参加の計画。 5～1 月：計画の実施（参加は自由意志とする） 2～3 月：実施状況の把握と必要に応じた改善策の策定。	4 月：模擬講義や出張講義などの担当者および担当順を計画。 5～2 月：計画の実施 3 月：実施状況の把握と必要に応じた改善策の策定。
目標達成を測定する指標	就職支援懇談会あるいは大学院説明会への出席者数および最終進路調査の回答などを把握して判断する。	留学プログラム相談会への出席者数、外国人研究者によるセミナー・討論会への参加者数、国際学会などにおける発表回数を把握して判断する。	出張講義などの回数およびオープンキャンパス・キャンパスツアー学科ブース来場者数などを把握して判断する。遠隔により生命科学研究内容を社会へ発信する機会を増やす。
自己評価 （☑を記入）	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	○バイオサイエンス学科卒業生による就職説明会を実施した。 開催日；令和 3 年 1 月 25 日、令和 2 年 12 月 12 日 受講人数；70 人 ○バイオサイエンス学科大学院入試説明会を実施した。 開催日；令和 2 年 12 月 12 日 受講人数；90 人	○コロナ禍にあり、留学支援プログラムや国際学会が軒並み中止となったため、今年度は当該項目について強力に推進することはできなかった。 ○オンラインアプリの活用により、海外研究者によるセミナーなどへの参加はのべ 3 回にとどまったが、国際科学雑誌に 36 報の論文が掲載された。	○オープンキャンパス（令和 2 年 8 月 2 日、8 月 23 日、9 月 22 日）、高校への出張・模擬講義（5 回）、市民講座（1 回）を実施し、全教員が協力してこれらに取り組んだ、コロナ禍ではあったが、可能な限り高校生や一般市民に広くその情報を発信した。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 オンラインアプリの活用により、現役学生の進路（就職・進学）支援プログラムに本学科の卒業生 10 名以上が講師として貢献してくれた。「就職活動を始める前に参考になった」「研究活動と就職活動をどのように両立するか参考になった」など参加学生からは好評を得た。	【長所】 オンラインアプリの活用によりこれまでよりも時間や経費にとらわれず、グローバルに情報発信・情報収集することが可能となる一面もあった。これらの経験や情報は学生の教育にも十分還元できた。	【長所】 コロナ禍にあったが、入試センターと連携して高校への出張講義を行うことができた。
	【特色】 キャリア形成をイメージできるような支援を目指している。	【特色】 外部研究資金を獲得するとともに、教員と海外研究者との共同研究に積極的に取り組み、学生の参画も推進している。	【特色】 教科書にある話を平易に説明するだけでなく、最新の研究成果を盛り込み、ホットな科学情報の発信を目指している。
現状説明を踏まえた問題点及び次	【問題点】 特になし	【問題点】 コロナ禍における国際的な交流（グローバル化の推進）の手法について、現時点では選択肢が少ない。	【問題点】 特になし

2021（令和 3）年度 包括的な点検・評価報告書

様式 2

年度への課題	【課題】 特になし	【課題】 コロナ禍における国際的な交流（グローバル化の推進）の手法について、 新しく多様な方法を模索したい。	【課題】 特になし
根拠資料名			

学部・研究科名生命科学部

学部長・研究科委員長名坂田 洋一

学科名・専攻名分子生命化学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	農場実習を通じて、建学の精神を涵養する	各教科の学生の学習習熟度を把握しさらに教科間の連携が取れた広汎・総合的知識の獲得を目指す。	全教員で一丸となり、新学科の新入生の教育に努める
実行サイクル	1 年サイクル（令和 3 年～ 4 年）	1 年サイクル（令和 3 年～ 4 年）	1 年サイクル（令和 3 年～ 4 年）
実施 スケジュール	1 年次に「農場実習」を開講し、伊勢原農場、棚沢圃場において野菜、果樹、花卉、水田、生態観察を行う。フレセミなどを通じて学科の教育内容を理解させる	各教科担当教員間の連携を密にし、小テスト、講義内における設問等より学生の学習習熟度及び応用力を測定し、これを向上させる又は補足する機会を設け、オンデマンド教材についてもより良い教材作成に努める	全ての教員が 1 年生に指導する機会（講義、実験、実習）を設ける
目標達成を測定する指標	レポートを学科教員が評価する	期末試験及び専門科目の効果測定や授業評価アンケート等による	全教員が講義、実験、実習を担当すること
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	昨年度はコロナ禍への対応のため、農場実習をオンデマンド配信で実施したが、本年度は通常通り、伊勢原農場、棚沢圃場において実習として実施した。野菜、果樹、花卉、水田、生態観察に関する実習を通じて、東京農業大学への理解を深めるとともに、フレセミなどを通じて、教育に関する本学科の特徴も教授した。	昨年度に一期生が卒業し、本年度は 2 サイクル目の教育活動となった。本年度は、対面授業と遠隔授業が共存する形式であったが、昨年度の経験を踏まえ、オンデマンド教材の質が向上するとともに、オンデマンド配信のメリットを活かした講義を実施出来た。各教科全般的に課題や小テストなども用いた多面的な評価を実施し、学生の習熟度を把握するとともに、低学習意欲の学生情報を教員間で共有し、サポート体制の充実を図った。コロナ禍のため、対面での学生面談が困難となる場合があった。	昨年度と異なり、多くの対面形式の講義や学生実験、農場実習、共通演習を通じて、全ての学科教員が 1 年生と接する機会を設けることが出来た。学生情報に関しても、学年担任や学科教員の間で共有することも出来た。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・化学系の学科でありながら農場自習を必修としている	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・学習意欲の低い学生へのサポート	【問題点】 ・なし
問題点及び次 年度への課題	【課題】 ・なし	【課題】 ・学習意欲の低い学生に対する面談を対面で実施したい。	【課題】 ・なし
根拠資料名	講義要項	なし	講義要項

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	外部資金の獲得に努める	研究成果の発表を積極的に行う	円滑な研究室運営に努める
実行サイクル	1 年サイクル（令和 3 年～ 4 年）	1 年サイクル（令和 3 年～ 4 年）	1 年サイクル（令和 3 年～ 4 年）
実施 スケジュール	科研費を始めとする競争的外部資金や学内の研究プロジェクトに積極的に応募する	卒論生並びに大学院修士課程 1 年生と教員がともに研究を行い、学会発表や論文の投稿などをを目指す	研究環境整備が完了したことから、研究活動の実施と各種設備の保全並びに新規採用助教のチュータリングに努める。
目標達成を測定する指標	各教員が外部資金の公募に応募したかを評価する	各研究室が研究成果を発表したかを評価する	学科として機器や備品の管理が適切に行われたか、新任教員のガイドが適切か評価する機会を設ける。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	ほぼ全ての教員が科研費へ応募しており、研究責任者もしくは研究分担者などとして研究費を獲得している教員も多い。また 2 名の若手教員が学内プロジェクトに採択されている。	コロナ禍ではあったものの、学科全体的に活発な研究活動が推進された。研究の性質上 4 年生の対外的な発表は難しいが、主に大学院生の研究成果を論文投稿や学会発表として数多く発表出来た。対面での通常の学会の開催が少なかったため、学会発表ではリモート形式の発表や視聴が中心であり、本来の活発な学会活動を体験させたいところである。他グループとの共同研究も順調に進んでいる。	各研究室の研究設備や共通機器である核磁気共鳴装置などの維持・管理は適切に行われるとともに、実験設備の学科内での共同利用なども円滑に行えた。機器管理の役割分担も明確で、本年度着任の新規教員たちも積極的に維持・管理に参画している。今後更に研究室内外の教員同士の連携強化を図る。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・コロナ禍の学会活動の中止やリモート形式での学会発表が多かった	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・科研費以外の外部資金獲得にも努める	【課題】 ・4 年生の段階で学会活動に参加させ、研究意識を高める	【課題】 ・研究活動をより活発化する様な研究室の雰囲気作りに努める
根拠資料名	科学研究費助成事業データベース、農生命科学研究所ホームページ	農大ホームページ、自己点検システム	なし

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	カリキュラム改定に取り組む	学科の宣伝活動を積極的に行う	在学生の進学動機や、入試動向などの実態把握に努める
実行サイクル	1 年サイクル（令和 3 年～ 4 年）	1 年サイクル（令和 3 年～ 4 年）	1 年サイクル（令和 3 年～ 4 年）
実施 スケジュール	ポスト完成年度を迎え、これまでの教育プログラムの反省を基盤として新カリキュラムを策定する。大学院博士後期課程設置申請準備を行う。	学外で行われる進学イベントなどに参加し、学科の魅力について紹介するとともに、HP などで情報発信する。指定高校を訪問し優秀な生徒の獲得に努める。	アンケートを実施し、どのような学生が、どのような経路で入学したのかを把握し、今後の宣伝活動のための情報収集を行う。また入試制度と入学後の成績や進路との相関性を調べる。
目標達成を測定する指標	卒業生の進路状況や卒論研究を評価し、さらに現行カリキュラムを総括し、新カリキュラムを立てる。大学院設置申請書類を作成し、資格審査を実施する。	学外イベントへの参加数、情報発信を行った媒体について評価する。	アンケート結果などを集計し、蓄積されたデータについて評価する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	現行のカリキュラムに対する意見交換を通じて、カリキュラム改訂へ向けた準備は行えたが、大学全体でのスケジュールの遅延により、具体的な新カリキュラムの策定には至っていない。退職教員の担当科目の引継などは順調に行われ、現カリキュラムの範囲内での教育活動は順調である。大学院博士後期課程の設置申請も円滑に進めることが出来た。	コロナ禍の影響が継続したため、通常の広報活動は不可能であったが、オンライン説明会やオンラインキャンパスツアー実施を通じた広報活動は行えた。オープンキャンパスでも人数が制限される中、来訪者に対して積極的に学部学科紹介を行ったが時間的制約もありやや不十分であった。高等学校への出張講義は例年より件数が少なかったが、依頼があった件には全て対応できた。新たな指定校の開拓や、指定校を中心とした高校訪問を行い進路指導担当者への広報活動を通じて、一定の応報効果は得られたものとする。	学科設立 5 年目となり徐々にデータは蓄積しつつあるが、年内入試の積極的な導入計画や 2 科目入試の導入などによる入試事情の変化が大きく、全貌の把握には至っていない。年内入試の受験生確保に関しては、指定校の新規開拓などを通じて対応し、大学の目標値には大きく及ばないものの、例年と比べ大幅に増加させることは出来た。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・コロナ禍のため対面での宣伝活動の機会が少なかった	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・2024 年度のカリキュラム改訂に向けて更に準備を進める	【課題】 ・積極的に高校訪問なども行い、更なる広報活動を進める	【課題】 ・2 科目入試などの結果解析と情報の蓄積
根拠資料名	特になし	学部学科ホームページ	特になし

学部・研究科名 生命科学部
学部長・研究科委員長名 坂田 洋一
学科名・専攻名 分子微生物学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	本学科教育目的の一つは微生物のエキスパートを育てることであり、そのためには生物や化学などの基礎的科目から生物化学や分子生物学などの専門的科目まで知識の向上と関連性の理解を高めさせることを目標とする。	卒業後の社会活動および貢献を踏まえ、社会人力を育成するために教養の知識や社会理解を高め、課外活動へ積極的に参加することを目標とする。	経済が世界レベルで動いている現在、世界共通言語である英語や各種文化圏の理解が重要である。そのため、語学力の向上や異文化への理解を深めることを目標とする。
実行サイクル	4 年サイクル（令和3年～令和6年）	4 年サイクル（令和3年～令和6年）	4 年サイクル（令和3年～令和6年）
実施 スケジュール	1～2年時：基礎科目の理解を深める。 2～3年時：専門科目の理解を深める。 3～4年時：各科目の関連性を理解し、卒業論文などに展開する。	学年問わず：部活、同好会、学科統一本部など。 1年時：フレッシュマンセミナー、共通演習、教養科目など。 2～4年時：各種演習科目、学内セミナーなど。	1～3年時：英語の選択科目を受講する。E-learning や English cafe など課外科目をできるだけ受講または参加。短期・長期留学に積極的に参加する。 4年時：各種発表会で発表を行う。
目標達成を測定する指標	全体、学年、学期における GPA 平均値と分布の状況から総合的に評価する。	成績がつく科目に関しては成績を指標に評価。その他は参加状況、活動状況、活動により得られた能力項目などアンケートなどを実施して評価を行う。	成績がつく科目に関しては成績を指標に評価。留学などはその地域で何人が活動したか、その内容も含めて評価する。また、各種発表会では会の公益性、レベル、発表内容などにより総合的に評価を行う。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	コロナ禍で一部の科目は遠隔での開講であったが、学生の基礎科目および専門科目の理解度が高まっている。	できる限り課外活動に参加するように指導しているが、令和3年度はコロナ感染防止に関する大学方針により課外活動が制限された。	英語選択科目未履修者が多くいる。留学も希望はあるが、実施できなかった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 適切な授業を行っている。	【長所】 多くの学生の社会人力が高まっている	【長所】 なし
	【特色】 複数の教員で適切な授業の遂行をしている。	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 GPA 下位者	【問題点】 アンケート調査の未実施（検討中）	【問題点】 英語に対する学生の向上努力が乏しい
	【課題】 GPA 下位者をなくすための指導、授業改善	【課題】	【課題】 声かけや指導により英語能力の向上を勧める
根拠資料名	GPA	GPA 部活、サークル、統一本部名簿（学生課）	TOEIC 分析データ

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	学生が研究室に入室するまでに研究室を立上げ、十分な研究活動体制を整えるとともに、研究を遂行する。	得られた研究成果を学会発表、シンポジウム、学会誌などで情報公開し、関連研究者などに情報を提供するとともに、一般の方々にも分かりやすい情報伝達手段で公開を行い幅広く理解してもらう。	学内の研究室またはセンターおよび学外の研究機関や企業などと連携し、課題に即した解決法の選抜および遂行を進める。
実行サイクル	____ 2 ____ 年サイクル（令和3～4年）	____ 2 ____ 年サイクル（令和3～4年）	____ 2 ____ 年サイクル（令和3～4年）
実施 スケジュール	1年目：研究に必要な機器の設置および試薬、器具などの確保および管理体制の確立。実験の遂行。 2年目：研究計画に基づいた研究の遂行。	1年目：研究遂行後の発表手段の検討など。 2年目：学会発表、シンポジウム発表を行うとともに学会誌などに投稿・発表し情報公開を行う。また、一般の方々向けに情報公開なども同時に進める。	1年目：企業や研究機関への共同研究の打診や受入れ。 2年目：共同研究の遂行。
目標達成を測定する指標	研究環境の充足割合を数値化して評価するとともに、研究が計画に対してどの程度進んだかを評価する。	発表の場、発表手段、数などを考慮して総合的に評価を行う。	研究の価値、企業や研究機関の規模、社会貢献度などから総合的に評価する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	コロナの影響はあったものの、各研究室で十分な機器の設置および試薬、器具の確保ができ、研究が十分遂行できる状態になっている。	学会の大会が中止またはオンラインの開催となった。研究内容について、SNSで発信する環境を構築した。	学内研究室間および学外の研究機関および企業などと十分な共同研究を遂行することができた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 学会誌への投稿など十分に行った	【長所】 学内、学外で複数の共同研究を行った。
	【特色】 なし	【特色】 微生物系の特色ある学会、学会誌で情報公開できた	【特色】 幅広い分野での共同研究対応を行った。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	機器備品リスト（会計課）	業績（学務課） ブログ（入学センター） Instagram、Twitter	業績（学務課）

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	各種研究機関、企業などに対して共同研究や連携などを行い、相手（共同研究者など）が合理的に課題を解決することに関与することを目標とする。	教員の専門性を生かし、各種方法を用いて一般の方への微生物およびその周辺領域の知識、理解の向上に努めることで社会に対する貢献を行う。	
実行サイクル	____ 2 ____ 年サイクル（令和3～4年）	____ 1 ____ 年サイクル（令和4年）	_____ 年サイクル（平成 ____ 年～ ____ 年）
実施 スケジュール	1年目：課題の収集と計画の立案。 2年目：課題解決に向けた手法の開発、試験など。	● 公開講座や出張講義・実験などを行う。 各種メディアでの情報公開。	
目標達成を測定する指標	共同研究または連携先の課題に対する充足度で判断を行う。	回数や参加人数、教育貢献度などにより評価する。	
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	各機関、企業などと十分に共同研究を遂行した。	リモート講義などを行った。メディアで情報公開を行った。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 ・
	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 ・
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 ・
根拠資料名	共同研究、受託研究、寄付など（農生研）		